



宮司プレス 八十三号

彦島八幡宮 宮司 ニュース

発行者 彦島八幡宮

宮司 柴田 宜夫

発行 平成二十五年四月三十日

◇宮司の柴田です。 宮司に就任して、一年の歳月が流れた平成十八年六月より、毎月発行を続けている「彦島八幡宮 宮司ニュース 宮司プレス」、今月号で八十三号となりました。今年になって、発行日が、大幅に遅れ、月末になってしまふという事態(じたい)が、茶飯事(さはんじ)となりました。とうとう四か月も続いて、発行日のワースト記録を更新中であります。「サミュエル ウルマン」というドイツ出身のアメリカの詩人が書いた「青春」という詩の一節(いっせつ)に、「青春とは人生のある一定の期間をいうのではなく、心の持ち方を云(い)う。 怯懦(きょうだ)を退(しりぞ)ける勇氣、安易(あんい)を振り捨てる冒険心(ぼうけんしん)を意味する」とあります。六年と十一ヶ月継続する事が出来たのも、「もうやめてしまおう」という怯懦(きょうだ)を退(しりぞ)けて、「今月は、お休みさせていただき、そのかわり、来月二回発行したらいいじゃないか。」などと容易(たやす)い方(かた)になびかなかったからです。 その勇氣と冒険心に火

をつけてくれたのが、お読みくださり、あたたかいお言葉をかけてくださる皆様のおかげです。心から感謝申し上げます。 ◇ようやく、初夏の気配を感じる昨今、ストープを収納(しゅうりゅう)しました。 休中には、また気温が下がる予報のようですね。 境内の楠は、やわらかい陽ざしに新緑を輝かせているのに、季節の移ろいは、晩春を惜しむかのように。 私どもは、立夏(りっか)、来週の五月五日に、「衣更(ころもが)え」ですが、少し季節を先取りにする、そんな感じがしますね。 ◇さて、日本人の平均寿命は、昭和二十二年の戦後まもなくは、男子五十歳、女子五十四歳でしたが、これが、平成二十三年には男子八十歳、女子八十六歳、六十四年間で、実に三十歳も伸長(しんちよう)したことになります。 私も、ようやく、昭和二十二年当時の、男子の平均寿命に到達したことになりですね。 さらに、六十五歳以上の人たちが総人口に占める割合が二十三パーセント、驚く

べきことに、四十七年後の西暦二、〇六〇年には、四〇パーセントに増加します。 必然的に、年金・医療・福祉などの社会保障費は累増(るいぞう)しますよね。 人口が減り、二人に一人の老人を支える(いわゆる騎馬戦型(きばせんがた)といいます)国になりまして、世界に冠(かん)する、誇ってきた保健医療が危機を迎えつつあります。 負担と給付のバランスを考えないと、現役世代も高齢者層を支えきれなくなりますよね。 実は、「深刻な超高齢化社会」なのです。

◇ところが、イタリアの国では、年齢は財産なのだそうです。 日本も、イタリア式に、年齢を財産に見立てるとするならば、「超高齢化社会」は、まさしく、「大富豪」、それにもなります。 斎藤史(さいとう ふみ)という歌人は、「ひたくれなゐ」という歌集に、「おいとまを いただきますと 戸をしめて 出ていくやうに ゆかぬなり生は」という

歌を残しています。 高度な経済成長、技術革新、医療や文明の進歩による現代社会では、勝手に、「おいとま」ができなくなりました。 そうであるとするならば、長い人生の後半期を健康で豊かに過(こ)し、少しでも住みやすい世の中にしたいものですよ。

◇西暦一、五〇〇年の世界で暮らす人々の生活水準は、皆、だいたい同じでした。ところが、イギリスでおこった「産業革命（さんぎようかくめい）」を転機（てんき）に、欧米を中心とする豊かな国々と他の貧しい国々の両極分解（りようきよくぶんかい）が加速していききました。この現象は、「大いなる分岐（ぶんき）」と呼ばれています。

日本でも、「大いなる分岐」以前の山里の生活は、魚や鳥獣（ちようじゆ）を獲（と）って食べるという、殺生（せつしよう）をしなければ、成立しませんでした。殺生は墮地獄（だじごく）という教えが、自分の後生（ごしよう）と読みます、あの世のことです）を恐れさせました。この「墮地獄」への恐怖は、日本と西洋を問わず、人と社会をささえた秩序的（ちつじよてき）幸福であつたそうです。作家の司馬遼太郎は、「天国をあこがれ、地獄をおそれるといふことが人間社会から消滅して以来、人間はひよつとすると偉大さというものを失つたかもしれない」と述べています。生活が豊かに便利になつた反面、「畏（おそ）れ多い」という謙虚な気持ち（薄れ）ていったのかもしれない。「畏（かしこ）む」とは、「感謝・尊敬・恐れ」という気持ちがミックスしたものです。我々にとつて最高のものを、神様にお供えをすると、神々

が元気になられ、人々に恵みがもたらせる、これが古来の純粋な信仰でした。古来は、日々の暮らしの大目標がですね、神様にお供えできる立派な穀物を生産することなのですね。これが、毎日の食物、「たべもの」です。神々、大自然からの「賜（た）ぶ物（たまわりもの）」だからです。「タベモノ」への感謝と祈願を込めて、伊勢の神宮さまでは、毎日朝夕に大御饌（おおみけ）祭さらに、毎年十月に、「神嘗祭（かんなめさい）」が行われます。二十一年に一度、「社殿、神宝（しんぼう）、装束（しようぞく）」も一新して営まれる二十年毎の大神嘗祭（だいかんなめさい）が、十月の式年遷宮であります。食前食後に手を合わせ「いただきます」「ごちそうさま」と感謝を捧げるのも、この遷宮（せんぐう）の心に通じるのですね。

◇天（あま）つ神（かみ）のトップに位置する伊勢の大神と国（くに）つ神（かみ）の代表ともいふべき出雲（いずも）の大神の大遷宮（だいせんぐう）が、本年、同じ年に行われます。しかも、東日本大震災を乗り越えてですね。極めて意義深いと思えます。「感謝・尊敬・恐れ」のミックスした心、「畏れ多い」という「大いなる分岐」以前の謙虚な気持ちで、偉大さを取り戻し、心身共に健康で、住みよい社会にしていきたいものです。

◇四月の祭典行事報告

▼月次祭 *四月一日、十五日

▼竹の子島金刀比羅宮例祭

*四月六日～七日

▼荒神社例祭 *四月九日

▼彦島地区戦没者慰霊祭 *四月二十一日

▼朝粥会 *四月二十一日

▼昭和祭 *四月二十九日

◇四月の宮司の行事会議等活動報告

▼八幡宮関係団体

◇維蘇志会役員会 *四月一日

◇維蘇志会総会 *四月五日

◇敬神婦人会総会 *四月十四日

▼山口県神社庁、同下関支部関係

◇山口県神社総代会研修会 *四月三日

◇下関支部施設慰問 *四月九日

◇神社庁役員会 *四月十一日

◇山口県八幡宮会 *四月十六日

◇下関支部幹事会 *四月十七日

◇山口県教誨師会 *四月十八日

◇教学研究会打合、八幡宮会、支部建国祭役員会

*四月二十五日

◇下関支部聞く会 *四月二十六日

▼人権擁護委員活動

◇下関市協議会総会 *四月二十五日

▼迫町自治会

◇組合長会議 *四月二十日